essay

「いただけない」話

その３

消費生活アドバイザー
赤城　由紀

「親の意見と茄子の花は、千にひとつも仇はない」　―

庭の小さな菜園に毎年植えている茄子が花をつけるたびに、母が口にする言葉です。

それが親の意見に耳を貸さない娘を諭すものなのか、茄子の見事さを称賛したものなのか、不肖の娘としては判断に苦しむところですが、昔の人は実にうまいことを言ったものだと、つくづく感心させられます。これぞ「ことわざ」、言葉の技というものでしょうか。ところでその茄子、どうしたことか今年のものはあまり花をつけませんでした。仇花のない茄子といえど、花が少なければ、実も少ないのは当然です。

道楽で作っているようなものなので、実りが少なくても「天候のせいかしらねぇ」などと呑気なことも言っていられますが、これが生業だったらと思うと、農家の方たちのため息が移ってしまいそうな気がいたします。

花の少ない茄子を眺めながら、近ごろの、「子どもに意見しなくなった親」「親の意見を聞かない子ども」というものについて考えておりました。

子どもの進路や就業についての意識調査等を見ていると、「子どもがしたいことをさせたい」「子どもの将来は子どもが決めるべき」といったように、子どもの意志を尊重する親の姿が目立ちます。自分がしたいことをしてこられなかったからなのでしょうか、反対に、自分も好きな道を歩んできたからなのでしょうか。それとも自分のしてきたことに自信がないからなのでしょうか。あるいは親が何を言っても、子どもは耳を貸さないという諦めがあるのかもしれません。

いずれにしろ、最近の若者を見ていると、親の物分かりが良すぎるのも考えものだと思ってしまいます。最終判断は子どもが下すにしろ、親の意見も大切に聞かないと、仇がないどころか花も少なく、納得のいく実も結ばないのではないかと思います。

今年、美味しい茄子の糠漬けがあまりいただけないのは残念ですが、茄子の花が少ないのは「もっ

赤城　由紀（あかぎ　ゆき）さん

札幌市生まれ。
北海道大学文学部行動科学科卒業後、コピーライター、短大研究員を経て、現在、シンクタンク外部協力研究員を勤める。消費生活アドバイザー。北海道女子短期大学、光塩学園女子短期大学非常勤務講師

と親の意見を聞くように」との神の思召しかもしれないと、反省させられるものがありました。

この夏、函館市から鹿部町に行く機会があり、通称「赤松街道」を通りました。ご存じの方も多いと思いますが、それはそれは見事な枝振りの赤松が道路の両側を席巻しており、飽きのこない風景を楽しませてくれます。

都会の並木を見慣れている人間にとって、この並木道は一際新鮮に映ります。

普段目にする都会の街路樹は、交通や電線の邪魔にならないように、雪が積もらないようにと、枝振りや姿形などはお構いなく、潔く伐られてしまいます。私はこれを見て、祖母の入院していた老人病院の整髪のようだと思ったものです。個人の好みや個性等とは関係なく、介護する側の邪魔にならないように切られてしまった祖母の髪を思い出し、思うに任せない環境に置かれてしまった木々の悲しさを感じずにはいられませんでした。

だからこそ、自由に枝を伸ばした赤松の姿は羨ましくもことさら素敵に見えました。

私の育った小学校の校歌には、「ポプラの木」が出てきます。校庭にはポプラの木があり、子どもたちはポプラのように「自ら真っすぐにすくすく育つ」ことが求められていました。その期待にそえたかどうかは分かりませんが、真っすぐに天に向かって伸びるポプラの木を見て、「すごいなぁ」と思って育ったのは確かです。

私は赤松の並木を見ながら、校庭に植えたのが「赤松の木」なら、どのような校歌が誕生するのだろうかと考えておりました。そこには「紆余曲折を経ながらも見事な枝振りの存在感のある大木となるように」との願いが込められるのかもしれません。「それもまたいいなぁ」と、ひとりで勝手なことを思います。

校歌や校庭の木は、その学校の「建学の理念」に裏打ちされたものが選定されるのでしょうが、普段目にする自然や身近な歌が子どもの人格形成に与える影響という

ものは、測り知れないものがあるのではないかと思います。

校歌には必ずといっていいほど川や山などの自然が折り込まれていますが、それぞれ異なった風土でどういった校歌が歌われ、どんな子どもたちが育っているのか、興味があるところです。

ポプラは、老木になると中が空洞になって倒れる危険があるということで、最近は「ポプラ並木を作ろう」という声もあまり聞かれなくなりました。ポプラの木も、成長期の世の中では絵になり歌になるのかもしれませんが、「年をとって中が空っぽになって倒れるかもしれない」などと言われると、高齢社会にはいただけない木のような気がしてきます。それもまた、人生を見つめる上では良い教材なのかもしれませんが…。

ある組織の何十周年かの記念に植樹をされたという方がいらっしゃったので、「何を植えられたのですか」とお尋ねしたところ、「さぁ、何かしら。用意して頂いたものだから。いろいろよ」とおっしゃっていました。

私も中学の時、学校創立二十五周年記念に植樹をしたのですが、どこに何の木を植えたのかは記憶にありません。ですから当然、その木が今どうなっているのか知る由もありませんが、そういった形だけの記念植樹はとても残念な気がします。

折角植える木ならば、やはり植える時に自分自身も志を立て、大きくなった姿を想い描き、折りに触れて思い出し、成長を見守り、そして後世の人へ思いを託して、百年の計をもって育てられるものにしたいものです。

近年は水や緑に対する関心が高まっており、自然に親しむ人も増えています。ガーデニングブームにも目を見張るものがあります。自然と接し、自然と感応し、自然からの教訓を得る。それは古来、人間がしてきた当たり前の姿なのでしょうが、一方で、人間同士が癒し合い、教え導き合う力を失ったがゆえの希求なのかもしれないとも思うと、少し淋しい気もいたします。